

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ことばの限界、ことばの力 ー十七世紀イギリス宗教詩研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2449

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



西川健誠氏学位請求論文

「ことばの限界、ことばの力：—十七世紀イギリス宗教詩研究—」 審査要旨

西川健誠氏の論文は、イギリス 17 世紀を代表する 3 人の宗教詩人、ジョン・ダン、ジョージ・ハーバート、ジョン・ミルトンを取り上げ、有限な人間の言葉を用いて、人知を超えた存在や事象を言い表そうとする宗教詩人たちの、創作に際しての葛藤を、義認と善行、神の超越と人間の自由意志、受難の一回性および聖餐によるその反復など、キリスト教の教義の根幹をなす神学的問題との関わりに着目して論じる。テキストの綿密な精読を基盤とし、文学研究者・キリスト者としての論者の深い問題意識に支えられた本論は、博士論文に必要な堅実さと説得力を十分に備えたものである。

ダンを中心に据えた第 1 部では、第 1 章で、『聖なるソネット(*Holy Sonnets*)』における 4 つのソネット「今宵は我が人生という劇の最終場面 (“This is my playes last scene)”」「毒ある鉱物も (“If poisonous minerals)”」「我が心を強打せよ、三位一体の神よ (“Batter my heart, three-person’d God)”」「私は巧みに作られた小宇宙 (“I am a little world made cunningly)”」を取り上げ、カトリックの主張する実質的義認観とプロテスタントが提示する名目的義認観との狭間で揺れ動く語り手、ひいては詩人ダンの葛藤を論じる。続く第 2 章では、聖餐の実在性と象徴性をめぐるカトリックとプロテスタントの神学上の論争と、宗教詩人が詩作、とりわけ、本来再現を拒むはずのキリストの受難という事蹟を言葉で表象することにおいて必然的に抱え込んだジレンマとの関わりを、ダンの『冠 (*La Corona*)』中の「十字架刑 (“Crucifying)”」や『聖なるソネット』の中の「わが顔に唾せよユダヤ人達 (“Spit in my face yee Jews)”」「今宵が世界の最後の夜であるとしても (“What if this present were the world’s last night?”)」「1613 年聖金曜日 (“Good Friday 1613”)」の読解を通して明らかにする。カトリックの信仰を捨て、イギリス国教会の聖職者となったダンが、教義の上でも詩作の上でも、救済や聖餐の実質的肉体性を志向するカトリック的な傾向を密かに持ち続けていたという論者の主張は、宗教改革時代の背景にある大きな思想的潮流を浮かび上がらせて興味深い。一方、現代アメリカのユダヤ人女性詩人で、批評家でもあるアリシア・オストライカーが、ダンの『聖なるソネット』に触発されて書いた「詩篇 (“Psalm)”」「対話 (“Dialogue)”」「コソボ空爆の期間に (“During the Bombing of Kosovo)”」「私はあなたを『在る者』と呼ぶと決めた (“I decide to call you being”)」の 4 作品を論じる第 3 章は、神聖なものとの肉体的なものとの混交、糺す者と糺される者との立場の入れ替わりに、ダンとの共通項を見て、神に対するダンの屈折した思いを、現代の視点から浮かび上がらせようとする野心的な試みと言える。

カトリックからイギリス国教会に改宗したダンとは異なり、生涯国教会に安んじた詩人ハーバートを取り上げた第 2 部は、第 1 部のダン論から、受難の表象の是非や、言葉

の有限性と神の恩寵といったテーマを引き継ぎながら、宗教詩人ハーバートの詩作をめぐる自意識的な営み、すなわち、彼の作品のメタポエティカルな側面に焦点を置く。第4章では、3つのセクションから成る詩集『寺院 (*The Temple*)』の中心となるセクション「教会 (“The Church”)」の冒頭に置かれた「犠牲 (“The Sacrifice”)」 「感謝 (“The Thanksgiving”)」 「聖金曜日 (“Good Friday”)」 「贖い (“Redemption”)」 などの詩作品に、受難のあるべき描き方を模索するハーバートの葛藤と成長の軌跡を辿る。同じく『寺院』に収められ、創作の行為そのものをテーマとする「ヨルダン河 I (“Jordan I”)」 「ヨルダン河 II (*Jordan II*)」 「真の讃歌 (“A true Hymne”)」 「先触れ達 (“The Forerunners”)」 などを論じる第5章、さらに、「生命 (“Life”)」 「徳 (“Vertue”)」 「真珠 (“The Pearl”)」 「花 (“The Flower”)」 の4作を取り上げる第6章では、宗教詩における時間と永遠の問題を、神の言葉と人間の言葉の隔絶、そしてそれが生み出す創作上の軋轢という観点から考察する。ダンとは異なり、宗派の上ではイギリス国教会に安んじたハーバートが、信仰における敬虔さと詩人としての野心とがせめぎ合う中で、詩の表現媒体である言葉そのものの意義を問い直すことによって、人間の有限性と神の贖いの問題をどのように追求しているかを、論者はこれらの章を通して丁寧に跡づける。続く第7章では、先にダンとオストライカーを比較したように、20世紀アメリカの女性詩人エリザベス・ビショップが、自らハーバートの「知られざる愛 (“Love Unknown”)」 の改作と呼んだ作品「草 (“The Weeds”)」 を、精神的覚醒を導く要因としての「心痛」という観点から論じ、現代にも通じるハーバートの問題意識を探る。

ピューリタン詩人のミルトンを扱う第3部の中心を成すのは、神の超越性の表象の問題である。第8章では、『楽園喪失 (*Paradise Lost*)』の神の言葉 (3:93-134) とサタンの誘惑 (9:684-732) を、人間的論理とその超越という視座から論じ、第9章では『楽園喪失』の同じ箇所についての20世紀の無教会キリスト者矢内原忠雄の講義を紹介しながら、神の言葉の特徴である論理的超越が生み出す詩情という逆説に光をあてる。神の超越と人間の自由意志に関する神学上の問題を基盤とするこれらの議論は、第1部、第2部での論者の関心を引き継ぐ形で、第10章のミルトンにおける受難の表象の問題へと発展する。ここで論者は、『楽園喪失』の天使ミカエルの言葉や『楽園回復 (*Paradise Regained*)』が示す十字架の観念化との共通性に言及しつつ、一般に失敗作とみなされるミルトンの断片的詩作品「受難 (“The Passion”)」 を、受難の語り難さを示すために詩人が意図的にぎこちない表現を用いたメタポエティカルな詩として読む。またミルトンの影響を自認する現代詩人リチャード・ウィルバーの「嘘 (“Lying”)」 を、語り得ないものをいかに語るかについての詩と論じる第11章は、語り得ないものを前に沈黙を選んだピューリタン詩人ミルトンの謹厳とも見える創作姿勢に、現代の視点から迫ろうとして興味深い。

政治的、宗教的動乱期であるイギリス17世紀に、有限である人間の言葉では語り得ない超越的な事柄を語ることを迫られた宗教詩人のジレンマと、個々の詩人によるその

ジレンマ超克への取り組みの特質とを論じる本論文は、文学と神学との交差する磁場を、現代の視点も交えながら浮き彫りにする画期的な視座による論文である。イギリス国教会をはじめとする各宗派の義認と聖餐に関する教義の違いについては、なお一層の精緻な考証の議論も望まれるが、「受難」の再現という神学的問題を論の基軸に据えることで、有限な人間の言葉で超越的な事象を語ろうとする17世紀宗教詩人たちの文学的葛藤の多様なあり方を、鮮やかに浮かび上がらせたことは、本論文の大きな功績と言えよう。神学的テーマに焦点を当てることで、単に宗教詩人とだけは括れないダンの詩の遊戯性や、ハーバートの詩の語り手が持つペルソナ性、叙事詩である『楽園喪失』とダンやハーバートの抒情詩とのジャンルの相違といった「純粹に」文学的な要素についての議論が幾分薄められる嫌いはなくもないが、この3名の宗教詩人たちを一貫した神学的テーマのもとに通観することによって、たとえば、従来否定的な評価を受けてきた『楽園喪失』の神の言葉の文学的意義に、新たな光をあてる可能性を開いたことは、論者の方法が文学研究として有効であることを逆説的な形で明らかにする。

ダン、ハーバート、ミルトンの影響をそれぞれが自認する3人の現代詩人、オストライカー、ビショップ、ウィルバーを論じた3つの章は、17世紀の宗教詩人たちが信仰深ければこそ抱え込んだ創作上のジレンマという本論文の主旨からは、微妙に逸脱するようにも見える。しかし、これら3つの章で示される作品解釈の秀逸さは、17世紀の宗教詩人たちが直面した創作上の問題意識や、そうした葛藤の中から生み出された詩の技法に照らして現代詩を読むことの意義を十分に納得させるもので、信仰の有無にかかわらず、過去の宗教詩人の作品が、現代の詩人や読者にとっても確かな存在意義を持っていることを実感させる。神学と文学という二つの学問領域の交差する点を鋭敏な感覚ですくい取り、テキストの精緻な読みを通して粘り強く論じた本論文は、宗教詩研究が本来あるべき正統的且つ困難な作業に誠実に取り組み、期待される成果を充実した形で示すものと結論できる。

最終審査は、2019年2月18日午後2時から本学の三木記念会館において公開で行われ、申請者の西川氏が論文の主旨説明を行った後、新野緑（主査）、難波江仁美、吉川朗子の本学教授と、御輿哲也名誉教授、京都大学の桂山康司教授から成る5名の審査員によって質疑応答がなされた。上述した審査員からの評価とコメント、質問に対して、申請者からは、日頃の真摯な研鑽と専門領域に関する豊富な知識を感じさせる明快で説得的な応答がなされ、審査終了後、審査員全員で協議の結果、博士請求論文として十分な内容を備えているとの合意を得て、申請者の論文を合格と認めることが決定された。